

生徒理解のための発達障害入門

——アスペルガー症候群について——

定 金 浩 一

Developmental Disorder Primer for Student understanding
—— Asperger's syndrome ——

SADAKANE Kouichi

要 旨

大学の教員養成課程において発達障害に関する内容を学ぶように通知されているが、各種テキストをみると概論が述べられている程度で、学校で勤務をした時には大変困ることが想像できる。また、学校不適応者に発達障害や発達障害が疑われる児童・生徒が多い。そこで、学生が教師になった時に、すぐに役立つように、対処法なども少し述べたテキストの作成を意図した。そこで、本稿は、発達障害について概略を述べると共に、学校現場で最も多いと思われるアスペルガー症候群やその傾向がある生徒について不適応事例やその対応方法、そして予防対策について記していくこととした。

キーワード：発達障害、広汎性発達障害、アスペルガー症候群

1. はじめに

長年学校現場で学校不適応の生徒に携わってきた経験から、学校不適応の生徒の中に多くの発達障害の生徒や発達障害が疑われる生徒がいた。そして、不登校の中には、発達障害や発達障害が疑われる生徒が多くいる（齊藤 2011, 佐々木 2013）。

平成27年1月19日 原稿受理
大阪産業大学 教養部 准教授

特別支援教育の必要性が叫ばれ、「大学における教員養成について、盲・聾・養護学校、小学校等並びに幼稚園及び高等学校の教員養成課程において、発達障害に関する内容も含めて取り扱うこととするよう、その充実に努めること」（「発達障害の児童生徒等への支援について」平成17年4月1日付 3局長連盟通知）という通知が出され、新しく大学を卒業して教師になる者は、発達障害について全員学習してきたことになっている。しかし、多くの新卒者を講師として学校現場で受け入れた時、言葉を知っている程度で、その知識では対応ができないのが現状である。

杉山（2003）は、「学校教育に従事するすべての教師は、広汎性発達障害の児童に出会わないことなどあり得ないので、すべての教師が最低限の知識を身につけることが必要である」と述べている。教師は、児童・生徒に大変大きな影響を与える立場にあり、最低限の知識がないと、児童・生徒を傷つけ、その後二次障害を与えることにもなることを自覚しておかなければならない。

そこで、本稿では、アスペルガー症候群について最低限の知識を得られるようなテキストを目指した。

2. 発達障害について

発達障害について、文部科学省のホームページや厚生労働省のホームページから公的な定義や広報を見てみる。

文部科学省のホームページの特別支援教育についてという項目の中に発達障害という見出しがあり、発達障害について以下のように書かれている。

『発達障害とは、発達障害者支援法には「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるもの」と定義されています。』（文部科学省 ホームページ）

そして、主な発達障害の定義について以下のように定義されている。（文部科学省 ホームページ）

自閉症の定義 < Autistic Disorder >

（平成15年3月の「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」参考資料より作成）

自閉症とは、3歳位までに現れ、1他人との社会的関係の形成の困難さ、2言葉の発達の遅れ、3興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害であり、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

高機能自閉症の定義 ＜ High-Functioning Autism ＞

（平成15年3月の「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」参考資料より抜粋）

高機能自閉症とは、3歳位までに現れ、1 他人との社会的関係の形成の困難さ、2 言葉の発達の遅れ、3 興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害である自閉症のうち、知的発達の遅れを伴わないものをいう。また、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

学習障害（LD）の定義 ＜ Learning Disabilities ＞

（平成11年7月の「学習障害児に対する指導について（報告）」より抜粋）

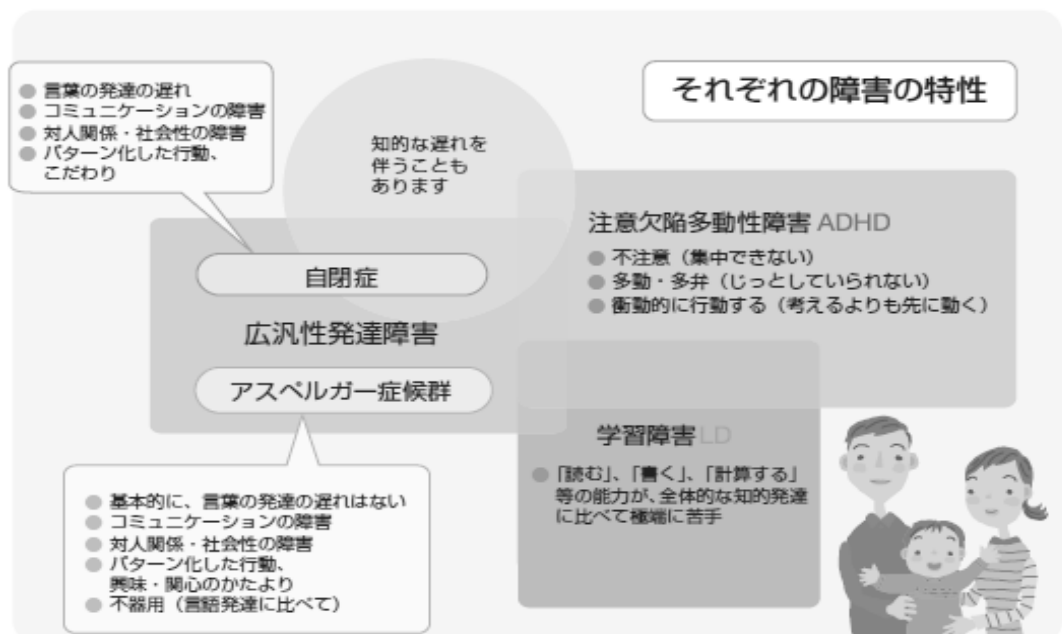
学習障害とは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。

学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない。

注意欠陥／多動性障害（ADHD）の定義 ＜ Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder ＞

（平成15年3月の「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」参考資料より抜粋）

ADHD とは、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、及び／又は衝動性、多動性を

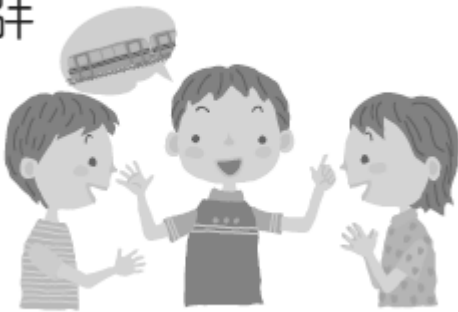


アスペルガー症候群

Bくんの例

他の人と話している時に自分のことばかり話してしまっ、相手の人にはっきりと「もう終わりにしてください」と言われないと、止まらないことがよくあります。周りの人から、「相手の気持ちがわからない、自分勝手にわがままな子」と言われてしまいます。

でも、大好きな電車のことになると、専門家顔負けの知識をもって、お友達に感心されます。



特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである。

また、7歳以前に現れ、その状態が継続し、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

※アスペルガー症候群とは、知的発達の遅れを伴わず、かつ、自閉症の特徴のうち言葉の発達の遅れを伴わないものである。なお、高機能自閉症やアスペルガー症候群は、広汎性発達障害に分類されるものである。

次に、厚生労働省・社会・援護局保健福祉部が作成した「発達障害の理解のために」のパンフレットから必要な部分のみを抜粋する。

『平成17年4月より発達障害者支援法に基づいた取り組みがスタート

しています。発達障害者支援法では、これまで制度の谷間におかれていて、必要な支援が届きにくい状態となっていた「発達障害」を「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」と定義し、支援の対象となりました。

この法律は、「発達障害」のある人が、生まれてから年をとるまで、それぞれのライフステージ（年齢）にあった適切な支援を受けられる体制を整備するとともに、この障害が広く国民全体に理解されることを目指しています。

ここに示したのはあくまで一例であって、どんな能力に障害があるか、どの程度なのかは人によって様々です。子どもにも大人にもこれらの特徴をもつ人がいます。発達障害は障害の困難さも目立ちますが、優れた能力が発揮されている場合もあり、周りから見てアンバランスな様子が理解されにくい障害です。そのため、上で紹介したような印象をもたれていることが多くあります。近年の調査では、発達障害の特徴をもつ人は稀な存在では

なく、身近にいたことがわかってきました。

発達障害の原因はまだよくわかっていませんが、現在では脳機能の障害と考えられていて、小さい頃からその症状が現れています。』（厚生労働省「発達障害の理解のために」）

このように、発達障害は大きく分けて、広汎性発達障害と学習障害、注意欠陥多動性障害の3つに分けられます。そして、前頁のそれぞれの障害の特性の図からもわかるように、3つの障害がきれいに分かれているのではなく、人によって何種類もの障害が重複されている場合があり、一人一人違っている。

今回は、学校で最も多くいると思われる広汎性発達障害について、特にアスペルガー症候群について不適応事例やその対応方法、そして予防対策について解説する。

3. アスペルガー症候群について

アスペルガー症候群という言葉が流布し、十分な鑑別ができていないにもかかわらず、アスペルガー症候群とラベルを貼る傾向が多く見られる。また、多くの人はアスペルガー症候群という固定された発達障害があると思っている場合が多い。そこで、アスペルガー症候群について正しい理解をするために、岡田（2009）のアスペルガー症候群の本に書かれているアスペルガー症候群についての説明を掲載する。『アスペルガー症候群を含めて、広汎性発達障害と呼ばれる一群の発達障害は、今日、明白に分類されるカテゴリーとしてではなく、スペクトラム（連続体）として理解されている。つまり、症状が幾つものそろい、かつ重度なものから、症状の種類も程度も軽いものまで、さまざまな段階がある。ちょうど大きな山があって、その頂きの部分に、従来からの自閉症があり、その裾野にアスペルガー症候群や特定不能の広汎性発達障害（PDDNOS）が広がり、さらにそれは、健康なレベルの人にも見られる傾向へと連続的に続いている。したがって、アスペルガー症候群か、そうでないかといった境目にこだわり過ぎることは、あまり意味がなく、それぞれのケースの症状や程度や特性は千差万別で、個々のケースの個別性にこそ眼差しが注がれるべきなのである。』と書かれている。

ここで注目すべきことは、自閉症（自閉性障害）、高機能自閉症（高機能広汎性発達障害）、アスペルガー症候群、特定不能の広汎性発達障害は、実際はどこに境目があるというよりも、スペクトラムとして連続的に続いているものだということである。

次に、世界保健機関による疾病及び関連保健問題の国際統計分類（ICD）とともに、国際的に広く用いられている精神障害の診断と統計マニュアル（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, DSM）DSM-IV-TRによるアスペルガー障害の診断基準を取り上げる（高橋三郎，大野裕，染矢俊幸訳 2003 『DSM-IV-TR 精神疾患の分類と

診断の手引』医学書院)。

A. 以下のうち少なくとも2つにより示される対人的相互反応の質的障害：

- ①目と目で見つめ合う，顔の表情，体の姿勢，身振りなど，対人的相互反応を調節する多彩な非言語的行動の使用の著明な障害
- ②発達の水準に相応した仲間関係を作ることの失敗
- ③楽しみ，興味，達成感を他人と分かち合うことを自発的に求めることの欠如
- ④対人的または情緒的相互性の欠如

B. 行動，興味および活動の，限定的，反復的，常同的な様式で，以下の少なくとも1つによって明らかとなる：

- ①その強度または対象において異常なほど，常同的で限定された方の1つまたはそれ以上の興味だけに熱中すること
- ②特定の，機能的でない習慣や儀式にかたくなにこだわるのが明らかである
- ③常同的で反復的な街奇的運動（例：手や指をばたばたさせたり，ねじ曲げる，または複雑な全身の動き）
- ④物体の一部に持続的に熱中する

C. その障害は社会的，職業的，または他の重要な領域における機能の臨床的に著しい障害を引き起こしている

D. 臨床的に著しい言語の遅れがない（例：二歳までに単語を用い，三歳までにコミュニケーション的な句を用いる）

E. 認知の発達，年齢に相応した自己管理能力，（対人関係以外の）適応行動，および小児期における環境への好奇心について臨床的に明らかな遅れがない

F. 他の特定の広汎性発達障害または統合失調症の基準を満たさない

岡田（2009）は，アスペルガー症候群の傾向をもった人でも，診断基準をきちんと満たす人は，一般人口の0.5%程度だと述べ，それよりはるかに多いのは，Aの対人的相互反応の障害の項目で一項目，Bの反復行動／限局性の興味の項目で一項目だけが当てはまるというケースだと指摘している。そして，こうしたケースは，特定不能の広汎性発達障害（PDDNOS）と診断されると述べている。

実際学校現場では，特定不能の広汎性発達障害の児童・生徒をアスペルガー症候群と理解している場合が多い。

4. アスペルガー症候群の症状について

アスペルガー症候群の症状は、大きく3つに分けて考えられる。(1) 社会性の障害 (2) コミュニケーションの障害 (3) 反復性の行為／限局性の興味 である。

岡田（2009）は「アスペルガー症候群」の中で各症状について詳しく説明し、よく整理されている。各症状毎の見出しをまとめてみる。

(1) 社会性の障害

- ・体や心が共鳴しにくい ・人との親密な関係が育まれにくい
- ・相手の視点で考えられない ・「心で感じる」ことが難しい
- ・顔や表情が見分けられない ・周囲の感情に無頓着である

(2) コミュニケーションの障害

- ・言語能力は優れていてもコミュニケーションに難あり
- ・コミュニケーションが一方通行である ・感情が言葉にならない
- ・難しいことはよく知っているが、日常的な会話は苦手である
- ・ごっこ遊びが苦手で、言葉を文字通りに受け取る

(3) 反復性の行為／限局性の興味

- ・同じ行動パターンに固執する ・狭い領域に深い興味をもつ
- ・人より物への関心が強い ・秩序やルールが大好き
- ・細部に過剰にこだわり、優れた記憶力をもつ

(4) その他の特性や伴いやすい問題

- ・感覚が繊細である ・動きがぎこちなく、運動が苦手な人が多い
- ・端正な容貌と大きな頭をもつ ・整理整頓が苦手で、段取りが悪い
- ・癇癪やパニックを起こしやすい ・夢想や空想にふける
- ・不安やうつなどの精神的な問題を抱えやすい

実際上に上げた症状を持つ生徒は多く存在し、学校で不適応を起こしている。このような症状を持つ生徒をいかに学校で適応できるようにするかは、教師の大変重要な仕事である。

5. アスペルガー症候群の児童・生徒を指導する際のポイントについて

上記のような症状や特性をもつ生徒に対して、学校で具体的にどのように対応したらいいか悩む。岡田（2009）は、アスペルガー症候群やアスペルガー症候群の傾向を持つ生徒を指導する際のポイントとして、以下に15項目を示している。

- ①一日の流れを決まったものにする
- ②明白なルールを作り、それを一貫させる
- ③ルールは、できるだけ具体的に作る
- ④ルールや日課は視覚化し、見えるところに掲示する
- ⑤一つ活動を行う前に、予めいつまでで終わりにすると見通しを与える
- ⑥活動と活動の変わり目では、前もって予告をするなどの工夫をする
- ⑦お気に入りのことは、苦手な活動の後です
- ⑧否定的な言葉を使わずに、できるだけ肯定的な言葉を使う
- ⑨感情的に叱ることは慎み、どうすればよいかを客観的に伝える
- ⑩よいことは、まめに褒めて強化をはかる
- ⑪よくない行動を叱るより、よくない行動をしなかったときに褒める
- ⑫ご褒美は、一回分は控えめで、積み重ねられるものがよい
- ⑬本人の特性を活かす方法を考える
- ⑭本人の主体性、気持ちを尊重する
- ⑮問題行動に過剰反応せずに、その背景を振り返る

これらのポイントを参考に、具体的に一人一人に応じた指導をどうするかを考えることが大変重要である。その時、すぐに結果が出なくても少し時間をかけてしばらく繰り返すことは重要である。なぜならば、広汎性発達障害の生徒は、変化に対して弱く、ルーティン化したものには安心感を抱くからである。

各生徒にとって最もいい方法を見つけることが大事である。

6. 思春期のアスペルガー症候群およびその傾向を持った生徒の今後の問題

アスペルガー症候群およびその傾向を持った生徒達は、思春期になると、思春期特有の問題を起こすことがある。

佐々木（2013）は、「思春期のアスペルガー」の中で多くの問題を取り上げている。以下で特徴的問題とその背景、具体的な例、および対策について佐々木（2013）の本に沿ってまとめる。

【金銭トラブル】

アスペルガー症候群の生徒は人の言うことを言葉通りに信じるため、だまされやすい。また、アスペルガー症候群の生徒にはコミュニケーション能力や想像力の弱さがあり、人の悪意を見抜くことができない。そのため、恐喝や犯罪に巻き込まれやすい。

【具体的には】

- ・同級生にお金を取られる。　・万引きの手伝いにかり出される。
- ・口止めされて誰にも言えない。

【対策】

本人の力だけで、犯罪から身を守るのは困難なので、お金の管理には第三者が積極的に関わり、彼らの生活を守っていく。また、日頃から本人を叱らないようにこころがけ、相談しやすい関係を築いておくことが必要。

【恋愛の問題】

金銭トラブルと並ぶ、思春期の代表的な悩みが恋愛である。アスペルガー症候群の生徒は、場に応じた感情表現を選びとることを苦手になっている。人を好きになったとき、その気持ちをいつ、どのように伝えればよい結果が出るのか、彼らには、なかなか想像できない。相手の気持ちを考えずにアプローチしたり、わからないまま自分なりの方法で突き進み、相手の家族から苦情を言われるなど、トラブルになることが少なくない。

【具体的には】

- ・好きな人についていく。　・はじめての会話で「付き合っ」と言う。
- ・マンガの通りに交際しようとする。　・悪気なく、異性の体にふれてしまう。

【対策】

性の知識を隠さずに、前向きに伝える。また、ソーシャルストーリーズ等を参考に、対話を通じて、自分の特性と行動面の問題を理解させ、恋愛観の摺れを認識させ、正しい行動を覚えさす。

【挫折感の問題】

学年が進み、勉強する内容が複雑になっていくにつれて、学習面で挫折する生徒がいる。アスペルガー症候群の生徒には、特性があり、学び方を工夫する必要がある。たとえば、彼らは話すことより話を聞くことが苦手で、その特性を気づかず、工夫しないで勉強していると、内容の習得に時間がかかる。

【具体的には】

- ・勉強についていけなくて挫折する。　・不登校・ひきこもりになって苦しむ。
- ・感情表現ができず、家庭内暴力をする。

【対策】

「生徒はこうあるべき」という理想を押し付けない。注意をするときは、まず本人の希望や悩みに理解を示し、適切なことを具体的に提示する。

【将来への不安】

アスペルガー症候群の生徒は、学校の勉強だけでなく、アルバイトや家事の手伝いをしているときにも失敗体験をしがちである。ほかの生徒が当たり前のようにこなすことができず、将来を悲観する。

彼らは周囲をみて、ほかの人のまねをするのが苦手で、思春期の年齢になれば自然にしているはずの礼儀や気づかいが、理解できない。

【具体的には】

・自分にあった仕事がわからない。 ・不安をつのらせ、うつ病になる生徒も。

【対策】

正しい「アセスメント」を受ける。正確な診断・評価を知ること、自分の能力を具体的に理解できる。また、問題にとらわれず、長所をいかす。そして、進路はマッチングを考えて決める。

7. 最後に

今発達障害に関する研究が多く発表され、雑誌臨床心理学 14 巻 3 号 (2014) は、発達障害研究の最前線を集めている。

米田・野村 (2014) は、生物学的側面を中心に発達障害の研究をし、新しい知見を見出している。また、別府 (2014) は、心理的側面を中心に、辻井 (2014) は社会的側面を中心に研究し新しい知見を見出している。そして、早期発達支援プログラム (山本・松崎 2014) など開発されている。研究が進むことによって、また違った支援方法などが提示されるかもしれない。

常に研修をし、新しい知識を取得し、発達障害や発達障害が疑われる生徒に最もいい対応をしてもらいたい。そうすることで、発達障害や発達障害が疑われる生徒達に最もいい環境が提供でき、その生徒達の人生を豊かにできる。

引用・参考文献

齊藤万比古 『不登校の児童・思春期精神医学』 金剛出版 2011 年

佐々木正美 『思春期のアスペルガー症候群』 講談社 2013 年

杉山登志郎・原仁 『特別支援教育のための精神・神経医学』 学研 2003 年

岡田尊司 『アスペルガー症候群』 幻冬舎新書 2009 年

高橋三郎、大野裕、染矢俊幸 訳 『DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引』 医学

書院 2003 年

米田英嗣・野村理朗 『発達障害研究の展望と意義① 生物学的側面を中心に』 臨床心理学 第 14 巻 3 号 金剛出版 2014 年

別府 哲 『発達障害研究の展望と意義② 心理的側面を中心に』 臨床心理学 第 14 巻 3 号 金剛出版 2014 年

辻井正次 『発達障害研究の展望と意義① 生物学的側面を中心に』 臨床心理学 第 14 巻 3 号 金剛出版 2014 年

山本淳一・松崎敦子 『早期発達支援プログラムの開発研究』 臨床心理学 第 14 巻 3 号 金剛出版 2014 年

文部科学省 「発達障害の児童生徒等への支援について」（通知） 平成 17 年 4 月 1 日付
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/06050815.htm

文部科学省 特別支援教育について「発達障害とは」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/hattatu.htm

文部科学省 特別支援教育について「よくある質問」「主な発達障害の定義について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/hattatu.htm

労働厚生省 政策レポート 「発達障害の理解のために」（パンフレット）
http://www.mhlw.go.jp/seisaku/dl/17b_0001.pdf